

J **apanese text**

2018年 秋/冬号 日本語編

アイ・オン・カルチャー

ローマと京都——響き合う手仕事の美
[ブルガリ]

p.027

2018年4月、ローマのハイジュエラーであるブルガリが、京都迎賓館にて文化交流特別会を開催。伝統文化の継承と革新をテーマに講演を行った。

その日、日本の伝統的な建築、入母屋屋根に数奇屋造りが美しい京都迎賓館に招かれたのは、工芸職人を目指したいという希望に満ちた日本の学生たち。一流のクラフツマンを擁し、ハイジュエラーという世にも稀なる作品を作り続けているブルガリと、伝統を守りつつ未来へとその技をつなごうと尽力している京時絵師がスピーカーとなり、学生たちの前で本物の美を生み出す仕事について語り合った。

ローマは2700年、そして京都は1200年の歴史に彩られてきた街。時間の中で醸成されてきた独自の美意識が、いかにそれぞれのクリエイションに影響を与えてきたのか。ジュエラーであれば宝石、蒔絵であれば漆や金などの素材へのこだわり。時代の移り変わりの中で進化すべきこと、守らなくてはならないもの——。互いの歴史や美意識をリスペクトしあいがらのトークは、文化を継承し未来へとつなげる役割を果たそうとする“真のブランド、真の職人”の心意気に溢れていた。未来を担う学生たちの心にしっかりと刻まれたことだろう。

一番上：海外からの賓客をもてなすために2005年に建設された京都迎賓館。

上から、参加した30名の学生は、講演後館内の見学ツアーにも参加した。京都迎賓館の調度品には蒔絵（写真）や漆芸、截金など日本の伝統技術が施されている。

貴重なデザイン画などを間近に見られるまたとない機会となった。

ジャンパウロ・デラクローチェ

ブルガリのハイジュエリー・シニアディレクター。ローマの古典や芸術に明るく、社のスタッフにブルガリズムを教育する役割も担う。

ルチア・シルヴェストリ

ブルガリのジュエリークリエイティブディレクター。美しい色とデザインに魅せられたブルガリの真髄を知る女性。

下出祐太郎（しもで・ゆうたろう）

京時絵師。下出時絵司所三代目。伝統工芸士。京都迎賓館にある60点もの漆工芸調度品を手掛けた。後継者の育成にも力を注いでいる。